論文の内容の要旨

題　目　　中国少数民族地域の観光開発
——羌族地域を例として

氏　名　　張　　曦

本論は中国四川省羌族地域におけるの現地調査で集めた資料を基づき、主に民族誌記述の手法を用いて、現代中国の少数民族地域の観光開発がはらむさまざまな側面を明らかにしようとするものである。観光開発に焦点をおいたのは、まず、社会主義国家の複雑な行政システムにおける少数民族の位置づけを明確にし、あわせて、改革開放後の社会主義における社会動態の研究に寄与することである。また、これまでの観光研究と開発研究の殆どは観光する側の外部研究者によって構成されてきたことに対し、本論文は、少数民族の「内部的」な視点から観光研究を再構成することを試みた。

本研究が主たる対象とする地域は中国四川省アバチベット族羌族自治州の羌族地域とそれに隣接する北川羌族自治県である。九寨溝・黄龍の観光開発によって、アバチベット族羌族自治州はよく知られているが、北川県は 2003 年 11 月に誕生したばかりの羌族自治県であり、その羌族地域としての実態は殆ど研究を通し報告されていない。

本論の研究の基になる現地調査については、1996 年から 2005 年 8 月まで、九年間にわたってほぼ毎年羌族地域に入って調査を行い 2002 年の 4 月から 2003 年 2 月までは長期滞在を含め、1996 年 8 月から主にアバ自治州の汶川県、茂県、理県で行われ、2002 年からは北川羌族県にも調査対象を広げた。

研究の過程で、羌族研究の先駆的研究者の Torrance や荘学本や胡鑑民などを始め、と近年の徐平、松岡正子、工藤元男による羌族と羌族地区における研究成果を踏まえて、また最近の中国観光開発研究成果も活用できた。羌族地域の観光開発研究及び中国の少数民族

地域における観光開発研究が空白に近い状況にあることを指摘し、観光開発が盛んになっている現在こそ、中国民族地域の研究にとって、観光開発研究は重要であることを示した。

日本における中国少数民族地域の観光の研究は、瀬川昌久や橋本和也の研究はあるが、極めて断片的である。とりわけ、中国西部の少数民族地域の観光開発を事例としたの観光研究も不十分であり、経済的に貧困な民族地域において、貧困解消の政策の一環としての観光開発が推進されている現在、その民族特殊性を踏まえ、豊かな自然環境を持ち、伝統的な民族文化を持つ少数民族地域における今後の文化保全と経済発展との両立による住民の生活向上にとって、本研究が積極的な意味を持っていると思う。

本論文が特に重視した点は、まず、中国の観光実態の全体を把握するために、中国における観光及び観光開発の概念と時代性に留意した。1978 年から、十数年に及ぶ観光開発に重点をおいた中央・地方政府主導の開発計画については、地域住民の利益が如何に尊重されたのか、観光開発がアバチベット族羌族自治州州内の経済向上に、とりわけ貧困問題解消にどれだけ役に立ったかを調査し検証した。

ついてに、近年の観光人類学の研究と開発研究成果を踏まえて、文化人類学の視角からアバチベット族羌族自治州の観光現象を検討し、中国文化すなわち漢民族文化を中心とする現代中国の文化体系の中における少数民族文化を位置づけた。また、観光人類学でしばしば論じられてきた「観光文化」および観光文化と伝統文化の関連性、観光文化の「真正性」について、アバ自治州の事例を通し新しい展望を試みた。

第三には、ゲストとホストの相互作用においても、内発的発展にも、住民自身の主体的な判断に伴う行動の重要性にと特に留意し、アバチベット族羌族自治州の観光開発事例における少数民族住民側の主体性を検証した。

最後に、中国少数民族地域の観光開発の現場では、しばしば経済状況の改善、生活の向上が最優先にされ、自然環境・文化環境に対する配慮が不十分であることが指摘されている。自然・文化資源に対する負荷を最低限に抑えることの可能性、言わば「持続可能な観光開発」の可能性を検証した。

本論文は九つの章と結論によって構成されている。第一章では、中国における観光史を整理し、改革開放後の観光理念・観光管理の面から、観光の新たな展開と多民族国家における観光開発において、貧困解消という少数民族地域の観光開発の実用的な側面について論述していた。第二章では、改革開放に伴う地域の観光開発の開始して以来、中国の国家的な大プロジェクトである西部大開発に至る過程における四川省民族地域の観光開発の特殊性を検討した。第三章では、現在の羌族地域における観光開発の進展を、観光化された地域、観光化されつつ地域、観光化が見込まれている地域の三つの段階に分けて、羌族地域の観光開発の現状と現場で起きた問題、とその問題に対する解決策を探る過程を検証した。第四章では、観光開発に密接にかかわっている羌族地域の自然環境・環境問題及び羌族の環境意識について論述した。第五章は、羌族地域社会の内部構造及び観光開発におけ

る内外の相互作用を記述し分析した。第六章は、羌族地域において推進してきた観光開発がもたらした効果を、経済的な面、社会的な面、文化的な面から検証した。第七章は、観光開発における女性の問題と女性が果たした役割について検討し、観光開発の過程にある羌族社会の女性の現状を記述した。また、女性の消費という側面から女性の自立性についても検証した。第八章は、スピ（羌族のシャーマン）儀礼などにみられる伝統文化の観光化の事例を取り上げ、観光開発にともなう観光文化と伝統文化の関係について分析した。第九章は、民族地域の観光開発と観光資源の問題及び観光開発における環境教育問題について論じた。

1949 年以後、一時期中国社会の表舞台から姿を消した観光は、文化大革命を経 1978 年以降の改革開放により、規制緩和や経済好調などを背景にして再び復活した。その中で、少数民族文化の自発的な台頭が見られた。羌族地域の観光・開発の事例が示すように、スケールの大きい自然観光資源に対し、大係りな開発プロジェクトを立案し、財政面で推進してきたのは中央政府と地方政府である。しかし、その開発地の住民である少数民族は彼らの生活の場に入り込んできたゲスト側の観光客との相互作用の中で、九寨溝の例に見られるように、次第に自発的に自らの民族文化を商品化にしていったのである。民族文化が商品化される過程において、当初、その主体は地域住民と観光者であった。明らかに、これは政府の働きかけによるものではなかった。観光が国家政治によるイメージ操作によって支配されることや、国家の政治権力を意識しすぎて国家権力・政府行為を過大評価することは、とりわけ中央集権的な中国において、政治権力以外の要因、例えば住民の自発的な動きを軽視される結果となることと指摘した。

羌族地域の観光開発の現状については、具体的な事例の民族誌を通して、理県、茂県、北川羌族自治県では、1980 年代後半からの四川省全体の経済発展や行政による交通網の整備が住民自身の自発的な観光発展の基礎を提供したことが明らかであり、観光開発において行政が果たした役割が大きいことを示した。こうした基礎を活用することが観光開発の更なる発展に繋がることを指摘した。雄大な自然と伝統文化をもつ民族地域の住民が村規模で独自に取り組む観光開発は、規模こそ小さいが、ゲスト側の観光行動と観光ニーズが変化しつつには十分に対応できる可能性を個々の事例を通して示した。

また、観光開発の過程で、地域開発の手法としての「文化観光」と「文化保全」との矛盾が顕在化し、観光発展に伴う経済利益の追求と生活様式の変化は、しばしば伝統文化を脅かしている。このジレンマを解消するためには、文化資源の適切な評価と文化資源を保存できる環境づくりが必要となることを提示した。また、村規模での観光開発における在来の末端組織と新たな村民委員会が地域に及ぼす影響を検討した。「自治的な」性格を持つにもかかわらず、機能しない例もある。従って、自然・文化を保存できる環境づくりには、ゲスト側とホスト側双方の自律と自覚が極めて重要と指摘した。

また、羌族と自然環境との密接な関連は、古くから伝承されている「山王菩薩」と「武昌菩薩」の対抗図に象徴されるように、羌族人の環境意識は、民話などの文化表象を通し

て内面化されており、その内面化されたものが行動を通して顕在化され、その行動が自然と生業の両立を保障してきたのである。

観光開発を取り込んだ地区では、期待された通り、経済状況が好転し、生活も向上したが、それと同時に、村内部の格差が生じ、拡大する傾向がある。先に豊かになった村人は、桃坪の事例が示すように、その経済力を背景にして、村での影響力を高めていく可能性があることを明らかにした。

また、観光研究・開発研究が示したように、女性がしばしば軽視され周縁化されてきたことを念頭において、観光開発にともなう少数民族女性の社会地位と役割と行動変化について記述し分析した結果、村においてもの観光開発が進んだ現場では、女性の対人サービスの専業化傾向が見られることを明らかにした。これに対し、観光化が一定の規模で進められてきた地域では、対人サービスが家事の延長線上に留まることを指摘した。

本論は、現在の観光・開発の研究が特に関心を持っている「観光文化」と「伝統文化」に、ついても取り上げ、観光文化形成の実態に即して検証した。従来の観光文化が通常ゲスト側とホスト側の交流によって形成されるとされてきたが、その場には、しばしば「行政的な力」、「経済的な力」が働いており、極端な場合には、ゲスト側が望むような形に近い観光文化が作られていることもある。茂県西福寨村における「オリオゾ」の演出はその典型的な例である。また、羌族地域における観光開発現場の実例では、観光文化と伝統文化の関係にはそれほど連続性が見られない。時間と経済的視点から見れば、短い「観光時間」内の観光文化と、ゆっくりと独自の文脈を辿って変貌する伝統文化とを同質視にすることはできない。理県休溪のスピが建物に関する経典を唱える際、二階についての内容を意図的に省いたことは、伝統文化が独自に変貌した結果とは考えにくい。こうした考察結果、「観光文化」と「伝統文化」は「場」が異なり、短い時間内でのゲストとホストの相互作用の結果、伝統文化の断片によって構成された「観光文化」は、観光の「場」でしか存続しえない。つまり、観光によって文化が再構築ばかりではなく、単に加速化されたばかりでもなく、その文脈と語り方も断片的になっており、従って、文化の連続性を強調すること自体の意味が失われているように思われる。

また、現場の具体的な事例を通して、観光文化の「真正さ」についても、観光客が観光する前にすでに抱いているイメージを前提として、これに応える形で成立する場合が多いことを示し、観光文化が形成される場では、現地住民にとっての「真正さ」とは関係が稀薄である。

最後に、中国の観光開発における資源利用の問題を取り上げ、羌族地域の事例に拠って、中央政府の「退耕還林」などの自然保護政策を踏まえ、具体的な事例で、観光資源の適正利用のあり方について論議した。観光資源は、とりわけ森林資源などは特に小規模な村では観光開発に重要な位置を占めている。また、観光開発と密接に関連している環境教育にも触れ、外来の環境教育に拠らない、羌族地域における具体的な実践の動きを紹介しながら、在来の羌族独自の環境認識を踏まえた環境教育の有効性を指摘した。